

インフルエンザに対する 漢方薬単独治療の諸経験

医療法人社団寛順会 土佐クリニック 院長 土佐 寛順

キーワード

- インフルエンザ
- 麻黄湯
- 随証処方
- 小柴胡湯

毎年のように猛威をふるう新型インフルエンザに対しては、様々な製剤の開発が進められているものの、その副作用は無視することができない。一方、インフルエンザの漢方治療は麻黄湯が代表的な処方だが、臨床における使用例をたどると、麻黄湯のみでは治療できない症状に対して他の処方が有効なことがあり、実践の積み重ねを通じた随証処方の確立が必要であると示唆された。ここでは、漢方薬単独で治療を行った症例を多く紹介する。

はじめに

現在ではインフルエンザの治療には、オセルタミビルリン酸塩、ザナミビル水和物、ラニナミビルオクタン酸エステル水和物などを使用することが一般的である。近年オセルタミビルリン酸塩による意識障害が報道されていることもあり、今回、漢方薬単独で治療する機会を得たので報告する。

症 例

症例1 9歳 女児

受診前日の昼から発熱し、夕方体温は38.6℃であった。インフルエンザ迅速試験でB型陽性と判明した。頭痛と咳があった。脈浮緊。無汗。成人用量の麻黄湯を投与し、翌日には解熱した。

症例2 31歳 女性

受診当日、朝から下痢が2回あった。吐き気もあり、昼に嘔吐が2回あった。来院時の体温は38.0℃であった。脈は浮。多少の喉の渇きを訴えた。インフルエンザ迅速試験でA型陽性と判明した。授乳中であったため、葛根湯を投与したところ、発熱、下痢、吐き気は改善したが、咳が残ったため、その後小柴胡湯を投与した。

症例3 36歳 男性

受診前日の昼よりだるさを感じていたが、体温は測定しなかった。咳、鼻水があった。来院時、体温は38.7℃であった。インフルエンザ迅速試験でA型陽性と判明した。麻黄湯を投与したところ、2日後に体温37.2℃に下がり楽になったが、痰が黄色く

なったため、小柴胡湯に転方した。

症例4 27歳 男性

受診前日に39.2℃の発熱があった。来院時の体温は38.4℃であった。頭痛があり、節々が痛かった。インフルエンザ迅速試験でB型陽性と判明した。麻黄湯を投与したところ、2日目に頭痛は改善したが、咳、痰が現れ、咽の痛みもあった。脈浮大実。麻杏甘石湯、桂枝湯(大青竜湯の方意)に転方すると、翌日には改善した。

症例5 13歳 女性

受診2日前から発熱があった。来院時体温は37.9℃であった。頭痛、咳、鼻水があり、咽の渇きを訴えた。インフルエンザ迅速試験でB型陽性と判明した。桂枝湯、越婢加朮湯(桂枝二越婢一湯の方意)を投与した。

症例6 17歳 男性

受診前日に発熱し、体温38.0℃であった。頭痛と咳があった。患者が柔道部の合宿を行ったのと同じホテルで、インフルエンザ患者が出ていた。来院当日の朝は体温37.8℃であった。インフルエンザ迅速試験では陰性であった。口渇あり、脈は弦やや弱。桂枝湯、越婢加朮湯(桂枝二越婢一湯の方意)を投与した。当日夜は39.0℃の発熱で、咳もあった。翌朝は体温38.5℃で、薬剤を嘔吐し、インフルエンザ迅速試験でA型陽性と判明した。脈やや大。桂枝湯、麻黄湯を投与したところ、翌々日の朝は体温36.5℃で、身体も楽になったが、念のため補中益気湯を2日分処方した。

症例7 17歳 男性

来院前々日に発熱し、市販の総合感冒薬を服用していた。来院時体温は37.5℃、咳と鼻水があった。インフルエンザ迅速試験でA型陽性と判明した。脈細緊。小青竜湯を3日分処方したところ、当日夜より解熱した。3日後来院時は体温36.9℃で、咳・鼻水ともに改善し、食欲も回復してきていた。脈は沈細。念のため補中益気湯を3日分処方した。

症例8 15歳 女性

当院来院2日前の夕方、体温39.0℃の発熱があった。他院でのインフルエンザ迅速試験は陰性で、アセトアミノフェン及び総合感冒薬を処方された。当院来院前日には体温40.0℃であった。来院時の体温は37.0℃であったが、咳と頭痛があり、関節痛はなかった。インフルエンザ迅速試験でA型陽性であった。柴胡桂枝湯3日分を処方すると、翌日には体温は36℃台に解熱した。翌々日再度来院した際、引き続き柴胡桂枝湯2日分を処方した。

症例9 25歳 男性

当院来院2日前から発熱した。来院時体温は39.3℃。頭痛、悪寒、咳、痰、鼻水があった。インフルエンザ迅速試験でA型陽性であった。麻黄湯、越婢加朮湯（大青竜湯の方意）3日分を処方したところ、翌日午後には解熱、3日後の再来院時には咳は多少あるものの鼻水はなかった。小柴胡湯3日分を処方した。

考 察

ほぼ1年間のインフルエンザ迅速試験での陽性症例の投与薬方を表に示した。約半数に麻黄湯が処方されている。『傷寒論』に、「太陽病、頭痛、発熱、身疼、腰痛、骨節疼痛、悪風、汗なくして喘する者は、麻黄湯之を主る」とあり、頭痛、発熱、寒気、身体の痛み、関節痛、咳等々は、インフルエンザの初期症状として典型的な症候である。しかし、残り半数の症例は麻黄湯以外の処方であり、随証処方が必要であると考えら

れる。2回目の処方初回治療で完治しなかった場合の薬方であるが、小柴胡湯を使用する機会が多かった。これは、少陽病期へ移行した症例と考えられる。この方法は、オセルタミビルリン酸塩等で熱は下がっても咳が残る場合にも応用することができる。

おわりに

本稿では、インフルエンザの漢方薬治療例の経験を示した。本来ならば1日分位で様子を見る（随証処方）が、現実的には2～3日分を処方している。ほとんどの症例が漢方薬単独での治療であるが、抗インフルエンザ薬との併用での治療効果も十分に期待できると思われる。

表 インフルエンザへの漢方治療

方 剤	例 数
処方1回目	
麻黄湯	29
桂枝二越婢一湯(桂枝湯+越婢加朮湯)	13
葛根湯	5
大青竜湯(麻黄湯+越婢加朮湯、麻杏甘石湯+桂枝湯)	5
桂枝麻黄各半湯(桂枝湯+麻黄湯)	5
麻黄附子細辛湯	2
小柴胡湯	1
柴胡桂枝湯	1
処方2回目	
小柴胡湯	11
参蘇飲	4
麦門冬湯	3
補中益気湯	2
半夏厚朴湯	1
竹茹温胆湯	1
柴胡桂枝湯	1
柴胡桂枝乾姜湯	1

インフルエンザ迅速試験施行194例中陽性例61例(X年10月～X+1年9月)